

第2回九州医療社会事業協議会 中堅者研修会参加報告 (H18. 2.4~2.5 大分県)

那覇市立病院 野原 育子

「経験年数は？」と聞かれる度、ドキッとしてしまう。経験年数に応じた援助ができていいのか？不安に駆られる。年数を重ねる度、その思いは増すばかり…。

こんな時、中堅者研修があると知り、飛びついた次第です。当協会からは、望月祥子さん（池田苑）、當銘由香さん（大浜第一病院）の3人が参加しました。

「元気がでるワークショップ“スーパービジョンの実際～専門職として“魂”の対人援助を学ぶ」というテーマで Solution Works 代表 磯貝希久子氏（臨床心理士）を講師に迎え、2日間行われました。講義や事例検討、ロールプレイなど、盛り沢山の内容でした。

研修は「Solution Focused Therapy（解決構築技法）」という聞き慣れない言葉に始まり、「問題解決アプローチ」との違いを比較しながら進められました。

この技法のセントラル・ソロフィー（中心哲学）は、①うまくいっているならいじらないこと！、②うまくいったらそれを繰り返そう！、③うまくいかないなら、何か違うことをしよう！の3点。

クライアントの力や意志を信じ、現実的で具体的な解決のイメージをともに作り出し、日々の生活の中の小さな例外を見つけ、それらを基に少しずつ解決を築き上げてゆくプロセスが、深刻で危機的な問題や状況への援助に大きな力を発揮することになる。

援助者が、予想できぬ事態にぶつかったり、行き詰まって袋小路におちいったとき、効果的で実践可能な指針やヒントを見つけ出せるように研修は進められた。

実際に、解決構築の技法を臨床の場で、どう使用するのか、どんな言葉で面接しているのかを主に、ソリューション・フォーカスト・アプローチの面接の構成とその実践方法を具体的に学んだ。

磯貝氏の「援助者は<Not knowing 知らないという姿勢>を保ちながら、クライアントの話に耳を傾ける。援助者がニーズを探すのではなく、クライアントがニーズを教えてくれる。「クライアント自身が解決する資源を持っている」と考える。クライアントが自分で答えを見つけて、動こう（変わろう）としない限り、解決しない。その人の人生の責任はその人にある。クライアント自身が生きていく希望を見出さないといけない。援助者が、先回りして、答えを出してはいけない。時間的な制約があって、遠回りのようでも、本人のペースに合わせて援助することが、結局は、近道になる。クライアントに変わろうとする意思がないといい変化は生まれえない。変わらないというのも本人の意思。」という言葉が印象に残った。

実際に、この技法を実践しているMSWは、「援助者として、解決してあげられない、何もできないというジレンマが軽減した。楽になった。」と話していた。

普段は「問題解決アプローチ」を主に援助する私にとって、異なる発想に、戸惑いを感じながらの2日間でした（解決構築から問題解決への転換は、右利きから左利きに切り替えるようなもの？らしい…）。終始??で、正直、研修内容をまだまだ、消化できていませんが、6月に研修の続きが、沖縄で開催されると聞き、それまでに、少しでも理解を深めておこうと思っています。

新しい実践方法を学ぶことで、これまでの自分の援助の振り返りができ、発想や視点を変えることで、援助の幅を広げるきっかけになったと思います。

1日目の夜は懇親会もあり、九州各県の方と交流や情報交換でき、いい刺激になりました。夜は、温泉に入り、心も体も大満足！中堅者のみなさん、ぜひ、6月24日、25日の研修は参加してくださいね！興味のある方は、以下の参考文献をご覧ください！

参考文献：

- 「家族支援ハンドブック」（金剛出版）インスー・キム・バーグ著／磯貝希久子監訳
- 「解決のための面接技法」（金剛出版）ピーター・ディヤング、インスー・キム・バーグ著／玉真 慎子・住谷祐子・桐田弘江訳
- 「解決へのステップ」（金剛出版）磯貝希久子/監訳